

Title	王維の話
Author(s)	橋本, 循
Citation	懐徳. 1956, 27, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90295
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

王維の話

橋本 循

唐の王維に「與魏居士書」といふのがあり、そのなかで、次ぎのように云つてゐます。

古之高者曰許由、挂瓢于樹、風吹瓢、惡而去之、聞堯讓、臨水而洗其耳、耳非駐聲之地、聲無染耳之跡、惡外者垢內、病物者自我、此尙不能至于曠士、豈入道者之門歟、降及嵇康亦云、頓纓狂顧、逾思長林、而憶豐草、頓纓狂顧、豈與倪受維繫有異乎、長林豐草、豈與官署門闌有異乎、異見起而正性隱、色事礙而慧用微、豈等同虛空、無所不遍、光明遍照、智見獨存之旨邪、此又足下之所知也、近有陶潛、不肯把板屈腰見督郵、解印綬、棄官去、後貧乞食、詩云、叩門拙言辭、是屢乞而多慙也、嘗一見督郵、安食公田數頃、一慙之不忍、而終身慙乎、此亦人我攻中、忘大字小、不其後之累也、

この意味を一寸申し述べて見ませう。

遠い昔の堯の時代に許由といふ高士がゐた。かれ許由は樹の枝に掛けて置いた瓢が、風に吹かれて鳴る音が喧しいと云つてこれを棄てた。また堯が天子の位を許由に譲らうとした時に、そんな話は聞くのもいやじゃ、わが身は汚されたと云つて、流水のほとりに行き耳を洗ひ清めたといふ話が傳へられてゐる。が、しかし、この許由の物の考へ方はどうであらうか。わしはどうも感服せん。一體、耳のなかに、いつまでも聲が留つてゐるわけでもな

し、又た聲が耳を染めて浸み込むといふわけでもない。したがつて耳を洗つたところで詮ないことである。それよりも心の持ち方が肝腎であらう。といふのは、そも／＼われらの五官は外からの事象によつて揺り動かされ、その結果、是非、善悪、美醜、好悪などの區別や判断をする。しかし、かうしたことは、云ふならば、妄惑が心性を垢がし、我性に執着するがためである。さういふことでは、まだ悠然自得の曠士といふことはできぬ。どうして道に入るものゝ門徑とすることができやう。時代は降るが晋の世になつて嵇康字は叔夜といふものがあつた。竹林七賢の一人である。性に任して、したい放題のことをなし、役人となつて仕へることは好まなかつた。會て友人の山濤字は巨源、これも竹林七賢の一人であるが、この山濤が嵇康に役人となつて仕へたら、どうかと勧めたことがある。その時、嵇康は吾れを理解せざるも甚しいとなし、山濤に絶交の書を與へた。その一節に次ぎのやうに云つた。

禽鹿少見_ニ馴育_ニ、服_ニ從教制_ニ、長而見_レ羈、則_レ狂顧頓纓、赴_ニ踏湯火_ニ、飾_以金鑣、纓_以嘉肴、適思_ニ長林_ニ、而志_ニ杜_ニ豐草_ニ也、

即ち小鳥や鹿でも、幼少の頃から飼ひ馴らして育てたならば、飼主の教へに服従するけれども、一たん成長してから羈束しようとしても、じたばた躁いで纓を頓り、湯火の中に陥ち込んで、束縛から逃れようとする。黄金の鑣を以て飾つても、うまい食物を與へても、そんなことには見向きもしない。却つてかれらをして、もとの棲家である深い林を思はしめ、平原の豐草を慕はしめることになるものである。人間もこれと同じだ。性情の赴くまゝに任すがいい。われの如き隱逸の志を抱くものに對して、どんな榮祿を以て束縛しやうとしても、何らの効果もない。却つて我が隱遁の志を助長せしめるだけである。

嵇康はこのやうに云つたが、これも亦た是非の見、好惡の情に拘はれた物の考へ方である。妄惑を去り、我性を離れたならば、狂顧して維がれてゐる紐を頓ることも、甘んじて維がれてゐることも、どちらにしても區別はな

いわけだ。同様に長林豊草の中を自由に飛び廻つてゐることも、役人となつて官署の中に勧めの身となつてゐることも、何らの相違もないわけである。結局心の持ち方一つであつて、何れが是、何れが非といふやうのことはなく、さういふ考へ方こそ、自我に捕はれ、外物に拘つた見方である。妄執から離れ、自己を空しくしたならば、是非善悪もなく、美醜好悪もない。差別の心が起ればこそ、物の眞性は隠れ、外物に捕はれ、ばこそ、空朗なる心の働きが衰へるのである。無差別平等は虚空に同じく、虚空なれば物に遮られるといふことはなく、されば光明遍く照して、知見常に存するといふことになる。これは足下の知られるところである。更に時世が降つて、東晉の末に陶潛字は淵明なるものがあつた。かれは板(笏のこと)を把り、衣冠束帯し、腰を屈して督郵(郡守の佐史督察す)に見ゆることを欲せず、印綬を解き官を棄て、郷村に歸つた。が、それから後は生活に窮し、他人の門に食を乞うて歩いた。その時の詩に「乞食」というのがあり、その中で「叩門拙言辭」といふ。是れは、いつも食を乞うて歩くので甚だ心に慙ぢたからである。そこで、もし彼が囊に督郵に見えてゐたならば、數頭の公田からの收穫で氣樂に生活ができたのであるが、之を慙ぢて忍ぶことをしなかつたがために、今度は他人に食を乞うて終身慙ぢかしい思ひをせねばならなくなつたのではないか。この陶潛の場合も、人と我という對立的な考へに捕はれたがために、凡ては虚空であるという大なる道理を忘れ、小さい己れに執着して、遂に其後の累に思ひ及ばなかつたのである。

大體かういふことであります。これは魏居士なるものが、高い徳、清い節を有しながら仕進を陋しむべきことと考へ、山棲谷飲、高居深視してゐたのに對し、王維が仕進を勸奨した手紙の一節であります。

そこで、われ／＼は之を讀んで、王維の人生觀と申しませうか、處世の態度、或は其の心構えが、どんなものであつたかをはつきりと覗ひ知ることができると思ひ甚だ興味深いことと存じます。

つまり、自分自身を含めての凡ての物に對して無差別的な考へ方、云うならば、あらゆる概念に捕はれないところ

の心の持ち方、かういふ物の考へ方は佛教的な空の考へ方とも云ひ得るでありませう。又、老莊的な無の考へ方とも云へるでありませう。

二

王維は熱心な佛教信者でありました。もつとも唐は佛教の盛んな時代でありまして、殊に太宗(六二七—六四九)から玄宗(七一三—七五五)にかけての間が隆盛を極めた時であります。當時の大官や文人學士で多少なりとも佛教思想の影響を受けないものは無いと云つても宜しいのであります。玄宗の開元、天寶時代、即ち王維と同時代に生きてゐた文學的人物、それは李白、杜甫を始め、裴迪、李頎、儲光羲、孟浩然など、何れの作家にも、香閣蘭若に遊んだ作とか、上人比丘を詠じた詩とかの無いものはありません。佛教が一世を風靡した時世でありました。かういふ風潮の中に生きてゐた彼がその影響を受けたであらうことは云ふ迄もありませんが、更に王維の家庭は佛教の篤信者の集りでありました。「請レ施レ莊爲レ寺表」に依りますと、母の崔氏は大照禪師というに師事すること三十餘年でありまして、常に褐を衣て蔬を食ひ、戒を持し禪を守り、山林に住むを樂しみとなし、志は靜寂を求めるといふ信者でありました。王維は此の母のため藍田縣に一ヶ所の山莊を造りました。そこには草堂や精舎があり、竹林果園もありました。母の死後、嘗て母の宴坐の跡や經行の所を見るにつけ、追慕の情に堪えず、永劫追福のために、この莊を布施して寺といたしました。宋の宋敏求の長安志によりますと、この寺は藍田縣南輞谷にあつて清源寺と稱へたのであります。

維の弟の王縉字は夏卿も並々ならぬ佛教信者でありました。門下侍郎とか中書門下平章事という大官になつた人でありませう。舊唐書の本傳に「縉の弟兄、佛を奉じ、葷血を茹はず、縉の晩年尤も甚し」とあります。財を捨てて寺を造ることは際限がなく、妻の李氏が卒すると、追福のために道政里の邸第を捨てて寶應寺といたしました。また縉は當時の權力者の元載や杜鴻漸と共に、代宗に對して佛教の福業報應の事を啓奏して、佛教信仰に引き入れました。代

宗は、それから佛教に凝り固つて澤山の僧侶を宮中に入れて、佛像を陳設し、經行念誦せしめることとなりました。そこを内道場と稱しました。かくて僧侶の勢力が宮中府中に蔓つて、終には公卿と權を争ひ威を擅にするものも出て來るといふ鹽梅であつた。安祿山や史思明が、それ〴〵己れの子供に殺されたことなどは、すべて所謂業報であるといふやうのことを聞いて、代宗の信仰は愈々甚しくなり、公卿大臣も既に業報は避くべからざるものであるからといふ譯で、人事は棄てゝ修めません。其他、縉の爲したところを考へて見ますと、これはまともな信仰ではなくて、狂信の域にあつたと思はれるのであります。そこで新唐書の縉の本傳の中には「太曆代宗年號の政刑、日に以て堙陵せしは縉と元載杜鴻漸とが之を倡へしなり」と云ひ、舊唐書は更に「其教を傷りしの源は縉に始るなり」と申して居ります。

ともかく以上の如く王維の一家は、極めて熱烈な佛教信者が揃つてゐたのであります。

かういふ家庭に育つたことが彼を佛教信者たらしめた大きな緣由となつたのでありませう。更には前述しましたが、當代の佛教流行の風潮の影響もありませう。しかし、王維の場合に於ては、さうした外界の緣由や影響よりも彼れ自身の個性或は天性が、佛教的な哲學思想に沈潜するに最も適した素質を有してゐたのではないかと思ふのであります。「酬張少府」の詩で、

晩年唯好靜、萬事不關心、自顧無長策、空知返舊林、松風吹解帶、山月照禪琴、君問窮通理、漁歌入浦深、

と歌つてゐます。漁歌とは申すまでもなく、屈原の「漁父」に、滄浪之水清兮、可以濯吾纓、滄浪之水濁兮、可以濯吾足、とあるのを指してゐるのであります。あなたが私に尋ねられる、人間には窮境に陥るものと、榮達するものがあるが、如何なる方法で世に處したらよからうかと。私はこの漁歌を以てお答へするだけのことである。といふのであるが、こゝにも、嚮に述べました「興魏居士書」にあるやうな思想が流れてゐるのを知るのであります。つ

まり、窮とか通とか、清とか濁とかいふ考へ方からは超越してゐる。置かれたる環境によつて心を擾されることは、我性のためだといふ信念が見えるのであります。

また彼と苑咸との贈答の詩があります。

苑舍人能書梵字、兼達梵音、皆曲盡其妙、戲爲之贈、

王維

名儒待詔滿公車、才子爲郎典石渠、蓮花法藏心懸悟、貝葉經文手自書、楚辭共許勝揚馬、梵字何人辨魯魚、故舊相望在三事、願君莫厭承明廡、

荅詩并序

苑咸

王員外兄、以予嘗學天竺書、有戲題見贈、然王兄當代詩匠、又精禪理、枉採知音、形於雅作、軌走筆以酬焉、且久未遷、因而嘲及、

蓮花梵字本從天、華省仙郎早悟禪、三點成伊猶有想、一觀如幻自忘筌、爲文已變當時體、入用還推間氣賢、應同羅漢無名欲、故作馮唐老歲年、

苑咸という人のことは唐書藝父志の別集類の部の苑咸集の註によれば、京兆の人であります。

この贈答の詩を見ますと、苑咸は梵字も書き、梵語も讀んだ人でありまして、勿論佛學に深く通じてゐたのであります。そういう無生の學に打ち込んでゐる人でありますから、普通に考へれば、俗界の官吏などになつて、經世の實際に携はるといふやうのことには、興味も持たず、また適しても居らぬであらうと思はれるのであります。そういう苑咸に對して、君は蓮花の法藏を讀んで心に悟りを開き、貝葉の經文を手づから書かれる人であるから、官吏たることは好まれぬかも知れんが、故人舊知は君が三公の位に登られて、治世の任に當られることを待望してゐると云つたのであります。

これに對する苑威の荅詩には、王維に對して次ぎのようなことを云つてゐます。あなたの心持は阿羅漢が佛道修業の結果、俗世間の名譽や欲望には何の執着も持たないと同じであらうのに、さらばとて、特に異を樹てゝ役人生活を逃れようともせず、わざと漢の馮唐が年寄るまで官吏となつて忠誠を勵んだが、そのようにいつまでも黙々として平凡にして俗惡な官吏生活を續けて居られることである。というのであります。そこで、王維が重ねて苑威に荅へた「重酬_レ苑郎中_一」という詩があります。

何幸舍_レ香奉_三至尊_一、多慚未_レ報_三主人恩_一、草木豈能酬_三雨露_一、榮枯妄敢問_三乾坤_一、仙郎有_レ意憐_三同舍_一、丞相無_レ私斷_三掃門_一、揚子解嘲徒自遣、馮唐已老復何論、

これに據りますと、王維の心持は、官吏として、大した榮達を望んでゐた譯でもないらしく思はれます。榮枯盛衰は天命である。自分はそのために、特別に漢の魏勃が曹參に面會を求める手段として、曹參の舍人の門外の掃除をしたという話があるが、そんなことをしたいとは考へない。また自分は他人が何と噂をしようとも漢の揚雄のように、それに對して辨解をしたり、自己宣傳はしたくない、といふのであります。

三

これらの詩を通じて知ることのできる王維の人生の見方、處世の態度は、やはり「與_三魏居士書_一」の中に見られるものと同じであります。彼れは己れが仕進の身を以て特に名譽であるとか、榮華であるとかは考へません。また不名譽とか、つまらぬことだとも考へません。そんなことは考へてゐなかつたのであります。出でゝ仕進の身とならうが、退いて隱逸の境に入らうが、そんなことは自我を沒却してゐる彼の心を喜悲せしめるに足らなかつたのであります。従つて經世濟民というような理想も無かつたのであります。また世の俗惡を嫌惡して、山林丘壑に逃れようといふよりのことも考へなかつたのであります。これは佛敎の所謂空寂清淨ということを確く信じ、さうした見地から凡

てのものを眺めた自然の結果であらうと思はれます。「胡居士臥病遣米因贈」の中で、了_二觀四大因_一。根性何所_レ有。妄計苟不_レ生。是身孰休咎。と云ひ、有無當斷見。生滅幻夢受。卽病卽質相。趨空定狂走。無_レ有_二一法眞_一。無_レ有_二一法垢_一。と申して居ります。これ亦た一切が空寂であることを述べたものであります。殊に卽病卽質相。趨空定狂走とか、無_レ有一法眞。無_レ有一法垢と申して居りますのは、有に執らわれず、無に偏らないことが空寂であることを述べてゐるのであります。餘程遠く佛教を研究して、その眞諦に達してゐたものと見えます。且つ彼は觀念的に之を知つたばかりではありません。彼の人生觀は佛教によつて形成されてゐたのであり、その處世の態度は佛教によつて導かれてゐたものと思はれるのであります。明の焦弱侯の筆乘には、以上の語を引用して「その見地の超然たるに非れば、安んぞ能く空を鑿ちて此を道はんや」と云つて居るのであります。

四

昔から詩人の中には、山林自然の裡に入つて嘯傲自適を樂しまうとしたものが少くありません。そして、それが、いかにも塵俗世界から超脱する手段のやうに思はれてゐたのであります。かういふ文人の態度は、遠く後漢の末から六朝にかけて盛んに行はれ、ずつと近世まで續いてゐました。さういふ考へは、老莊の道學や佛教の思想的影響に負ふところ頗る大なるものがあります。然し、さうした隱逸詩人とか自然詩人乃至山林詩人が、眞に果して、境遇の榮枯に無關係に、俗世間から逃れた人ばかりであつたかといふに、却つて仕進しても榮達がでなかつたとか、己れの仕へてゐた朝廷が崩壞したとか、ともかく己れの境遇に不平憤懣の念を抱いてゐた人が少くないのであります。又、或は隱逸放浪を以て高尚自由と考へ、もしくはその美名を得やうとしたものもあります。云ふならば、俗世間に對する名利の執着の念が斷ち難い、しかもそれが得られないことから、却つて反射的に山泉丘壑の境に入つたとも考へられるのであります。

陶淵明、謝靈運から唐の自然派詩人と稱せられるものは程度の差はあつても、すべて以上のような動機から世を遁れたたと見られる節があります。さういふ退嬰的な遁世の心に對して、佛教思想は都合よく内觀と慰安の機會を與へてくれる。延いては香閣精舎の古松慈竹の間に遊ぶことを愛することにもなります。おのづから、佛教的思想のただよつてゐる詩を作ることもなります。が是を以て、其の人生觀が佛教思想で形成され、その處世の態度が、飽くまでも佛教思想で導かれてゐた王維と、思想の本質までも同じであつたと考へることはできないのではないかと思ふのであります。王維はみづから「吾生好二靜淨一」戲贈張五弟諷と云ひ、「晩年唯好二靜一」少府と云ひ、「已悟二寂爲レ樂一。此生間有レ餘。思歸何必深。身世猶空虛山僧」飲裴釜と云つてゐます。前にも彼の悟境の深いことを申しました。眞に彼は此世を空寂と觀じ、空虛と悟り、靜淨を好んでゐたのであります。しかも、不平憤懣があつて、この心境に逃れた譯でもありません。「吾れ生れながらにして靜淨を好む」だのであります。こゝが王維の他の詩人と異なる點であります。王右丞集箋註の撰者である清の趙松谷は、その序で、

天機清妙にして物と競ふことなし、人事の升沈得失を擧げて、以て其中に膠滯せず、故に其の詩を爲るや、眞趣洋溢して凡近を脱棄す。

と申してゐます。又、松谷の兄の趙殿最も序の中で、

右丞禪理に通ず、故に語に背觸なく、中邊に甜徹す、空外の音なり、水中の影なり、

と申してゐます。これらの評語は、彼の作品はその禪悅を通して詠じ出だされたものであることを述べてゐるのであります。俗界の紛雜に對し、満たされざる煩惱を慰さめんがために、また之を發散せしめんがために、詠じ出されたものではないのであります。

さうした清涼な心地を有してゐた彼の詩は「冲澹自然、洵に有唐至高の境なり」養一齋詩話卷一と云はれるのであります。

す。自我の意識を交へずして靜かに自然人生を觀照したのであります。然し、その反面、朱子の「詞は清雅なりと雖

も、亦萎弱にして氣骨なし」楚辭後語といふ批評もあります。何しろ參禪悟佛、冷然獨往の詩人王維と、窮理居敬の學を説き、國事を憂ひ、時政を慨し、節義凜然、忠厚の念の篤かつた朱子とでは、殊に朱子は佛教を排撃しましたが、人生觀も處世の態度も異なつてゐます。何れが是れが非といふことはできません。たゞ王維は此の如き詩人であつたといふことを申し述べた次第であります。